

R2・4・15

第3号

通巻149号

# 学院通信

発行  
金光学院  
719-0111  
岡山県浅口市  
金光町大谷1486  
TEL (0865) 42-3115  
FAX (0865) 42-3114



学院春季霊祭

## 「天地を貫くご祈念を」

学院長 高橋 寛志



令和元年度の本科入学式で、新学院生に対して、「天地を貫くようなご祈念ができるように、祈りの稽古をしていただきたい」と言った。学院生たちは、一回一回のご祈念に力を込めてご祈念してきたと思う。睡眠不足や疲れで、ご祈念中寝るような人もいたが、それでも、気持ちだけは気合を入れてのご祈念であったと思う。しかし、そのご祈念も、実際どれほどの効果があるものか分からないところがあるのである。

しかし、ある祈りの実験をした結果を見ると、明らかに祈りの効果が窺われるのである。その実験は、敬虔なキリスト教の信者さんが、一人の被験者（患者）に対して、五〜七人が祈った結果をまとめたものである。学院で、これまで祈りの稽古をして来た学院生たちも、それなりの祈念力ができてきていると思う。折しも、新型コロナウイルス感染症が、日本各地に蔓延しつつある時、今の学院生が貢献できることとして、新型コロナウイルス感染症の終息を勢祈念することが一つあるのではないかと思えるのである。

そして、新型コロナウイルス感染症の影響で急遽、本部月例祭が修徳殿で、祭員のみによって仕えられることになり、学院生は学院広前で、その時間ご祈念をして遥拝することになった。そこで、そのご祈念の後、さらに新型コロナウイルス感染症の終息を願って、三十分ぐらいの勢祈念をすることにした。学院生にとっても、今までご祈念を稽古してきたものを試す機会であり、また、このご祈念を通して、よりご祈念力を強める稽古にもなり、そして、学院にいながら、世間の難儀を救う働きができる機会でもあると思う。

このように、信心（ご祈念）は、現代社会の問題と常に繋がっていないといけないと思う。それが、学院を出てからも大切な心構えである。自分のご祈念によって、いかに人が助けられるか、また社会の問題を解決できるか。いかに大きな問題であろうが、すればしただけの結果が現われるはずである。そのご祈念に最大限の真を込める努力をし続けるあり方を身につけていただきたいと願っている。その姿勢があるかどうか、卒業後の大きな違いになってくるように思うのである。

# ご卒業おめでとう

## 先輩諸師からのごとば

### 時代を超えて共に



富山県・中伏木教会長  
大代 信治 師

学院在学中は教祖様のご信心を学び、天地のお働きを感じる日々であったでしょう。これからは自らの信心で天地を感じ、道を踏みたどることになります。それは教祖様と同じことをするということだと思っています。時代や地域は違いますが、天地の道理に基づいて、神人の道をわが暮らしにいただき、道の道たるところを愚直に貫いていただきたいと思っています。

今までは同期の仲間たちと同じことに取り組み、同じことを思い、同じ願いを共にしてきたことでしょう。これからはそれぞれの取り組みがあり、思いや課題も異なるものになるかもしれません。しかし、同じ道を歩む心や願

いは変わりません。

それは時代をも超えたものと感じています。教祖様も、すでにお亡くなりになった先輩方も、遠くの地にあつて御用されている仲間たちも、同じ神様をいただき、神様の願いを受け、自らの願いとして御用くださっているのです。そして、それは将来においても同



学院春季霊祭 (献饌)

様であり、今日の御用と五十年後、百年後の御用も、共に重なり合いつつ、様々に展開して御用ができ、道が広がっていくということだと思っております。ご神願成就を願いとして、ここからの御用の日々を共に歩ませていただけることを心から喜んでいきます。

### これからの金光教へ



福岡県・仲原教会長  
佐田 恒行 師

金光教教典が刊行されてから三十七年経ちますが、繰り返し繰り返し読ませて頂きますと、教祖様の御信心がくつきりと浮かび上がってくるものを感じます。そして、現在の金光教は、はたして教祖の御信心に基づいたものと言えるだろうかという疑問も出てまいりました。第一に、教祖様に現れられたこの神様が、どういうお方であるかが今日まできちんと伝わっているだろうかということ。何か抽象的な、おられるやらおられないやら分からないお方にしてはいないだろうか。教祖様が説かれたように、道理として認め



教典研究発表

ざるを得ない、現実のお方として、お道で説かれておるだろうか、ということなのです。私は思うのです。天地金乃神様というお方をきちんと把握しておかないと、迷うようなことになりはしないかと。今日の教育や社会風潮など、様々な情報によって、偏った概念、間違った観念に、とらわれているかもしれないのが私共だと思っております。どうぞ皆様方も、教祖が頂かれた神様を、素直に、道理をもって頂かれ、お道を世に顕していく御用につとめられ、「なるほど、金光大神に現れられた神様こそ真の神様であった」という確信を得られんことを切願するものです。



調饌実習 (裁ち物)



月例祭遥拝

### 先を楽しみにできる信心を



平成30年度卒業生  
福岡県・合衆教会  
安武 信生 師

ご卒業おめでとうございます。皆さんと過ごした信行輔導期間からおよそ一年が過ぎ、いよいよ皆さんが教師になる準備ができたことを喜ばしく思います。

現在、教団はもとより、世界的にも様々な問題が取り沙汰されている状況です。「先を楽しみに信心せよ」と言われますが、日々の生活の中で大小様々な問題に直面すれば、とても先の事を楽しみにできないというのが人の心の弱さです。

思うに、「先を楽しみに」というのは樂觀的になれということではなく、将来が楽しみに感じられるくらい信心に打ち込むことを願われての言葉なのです。皆さんはこの一年間でお道の信心について多くの事を学ばれたわけですが、これからはそれを日々の生活の中で実践し、さらにそれを人に伝えていく立場になります。精一杯打ち込めば、打ち込んだ分以上を返して下さるのが

この神様です。そして、同じようにそれぞれの持ち場で日々取り組んでいく同期の仲間がいて、同じ道を歩んでいく先輩教師達があります。どうぞ、皆さんが先を楽しみにできる信心になりますようお祈り申し上げます。

### 皆様の出発に向けて



平成30年度卒業生  
岡山県・岡東教会  
高橋 実可子 師  
(旧姓石原)

ご卒業おめでとうございます。一日一日、御霊地というお徳と祈りに満ち溢れる中での修行を経て、今を無事過ごしておられますことをありがたく思います。

信行輔導期間中、一生懸命に修行の型を覚え取り組み、自分なりに考え突き詰めていく皆様の姿、また、御霊地へ参拝させていただく度に成長される姿を見て、これからさらにどう変わっていくだろうと楽しみに思っていました。祈りに包まれての学院生活、本当にいろいろな課題に出合ったと思います。思い悩んだその事柄にどう取り組み、



年頭御用奉仕 (湯茶接待)

何を学んだかは大事な経験です。しかし、案外日常の同期との会話やふとした言葉の中にも、これからの御用に活きる大事なものが隠れていたりします。これからお教会で、あるいは社会でと、いろいろな場で活躍されることでしょう。楽しくても苦しくても、そこが御用の場であり、御取次の場です。ここに学院での経験が活きる瞬間や、型が実際になる瞬間、皆様に掛けられた願いの一つ一つに気付かされる瞬間があると思います。どんなときも心に神様をいただき、祈りを持ち続けていたいただきたいと思います。神様がつけてくださった道筋のその先を楽しみに、共々にお役に立たせていただきますように。

# 学院生活を振り返って

## 学院生の「指」

「おかげセンサー」を張る生活



山口県・柳井教会  
熊谷 元喜

学院生活は「おかげセンサー」を張り巡らせていく日々でした。一見すると単調にも感じられる毎日ですが、繰り返すなかでセンサーは徐々に感度を増していきました。今まで見過ごしていたような草花や虫たちの移ろい、星座の動きを感じるようになり、身をもって天地のはたらきを学ぶことができました。

センサーは自分の内面にも向いています。少し神様に向かえたかと思えば、次の瞬間には自分の汚い部分を突きつけられました。自分にウンザリすることもありました。自分と向き合うことで、これまでの経験を「このための差し向けだったのか」と肯定的に捉えなおせるようなおかげも授かりました。

この一年間、心の内に「おかげセン



修徳殿入殿

教話実習

サー」を巡らせてたくさんのおかげを感じられました。しかし、自己に「閉じた」信心になっていた節もあります。今後は教師としての信心をより意識して、人の助かりに向けて「開かれた」信心を展開していけるよう、一層励まさせていただきます。

### 出会いは成長の種



福岡県・芦屋教会  
日吉 祐里

令和元年度の学院生に導かれたこと、大変ありがたく思います。この一年で一

生の仲間と出会えました。年齢も育ってきた環境も違う私達。信心も人それぞれ形があります。それは、まるで生け花の様です。生ける人が自分の感性で表現するので、同じ花材であっても、それぞれに趣の違う美しさが引き出されます。同期が休学することが決まった時、とても辛かったですが、そこには神様のどんな願いがかけられていて、また今自分に何ができるのかを考えさせられました。そして、この一瞬一瞬を大切に信心させていただけこうと思ひ、神様に向かいました。人の問題を自分自身の問題として受ける中で、私とは違う考え方があつたりながらも、いろいろな求め方があることを学び、少しずつ信心の受け物ができていったように感じます。

思い返せば、いろいろなことがありましたが、すべて神様の手のひらの中で起きてきたことです。そこには私達へかけられた神様の願いがあります。だからこそ、もつともつと神様に思いを寄せていきたいと思ひます。これから先も御神縁を頂いた道の友垣と、あいやかけよで共に育っていく関係であり続け、そして、たくさんの方の祈りの中で、今日までの自分があることに感謝し、恩に報いる生き方をしたいと思ひます。

## 日程

(冬期在籍教会実習後から卒業まで)

- 12月
  - 29 帰院式
  - 30 大掃除
- 1月
  - 5 年頭御用奉仕
  - 6 第六回 求道の日
  - 9 教話実習②
  - 11 他宗教研修 (井山宝福寺)
  - 13 教典研究発表
- 2月
  - 4 他宗教研修 (立正佼成会 尾道教会)
  - 11 第三回 部屋替え
  - 13 18 礼典実習
  - 20 23 2 在籍外教会実習
- 3月
  - 11 13 第三回 修徳殿入殿
  - 24 学院・春季霊祭
  - 27 第三信心レポート懇談
- 4月
  - 2 6 天地金乃神大祭御用奉仕
  - 11 14 学院・天地金乃神大祭
  - 13 14 身辺整理・大掃除
  - 15 卒業証書授与式



障子張り (学院講堂)

# 11月の歩み

## ■他宗教研修

他宗教研修として、一月九日に臨済宗井山宝福寺、二月四日に新宗教である立正佼成会の尾道教会を訪問した。



井山宝福寺 (座禅)



井山宝福寺

宝福寺では、法話、座禅修行、作務など、寒中に伝統的な禅寺の修行を体験した。立正佼成会尾道教会では、当日、開祖さまご命日式典日にあたり、参列させていただいた。教団の概要説明を受け、車座になり悩みや問題を語り合う法座も体験した。学院生それぞれが、違う宗派の実際に触れ、広く宗教の働きや役割を理解することができた。そして、ここまで学んできた本教についても今までとは違った視点で見直し、自らの使命と役割を確かなものにする機会ともなった。また、多くの方から、学院生へ期待と励ましの言葉をいただき、大変ありがたいことであった。



立正佼成会 (法座)

## ■選択別研修

選択別研修を一月十三日から二月三日まで実施した。四つのコースの中から、各自の関心に沿って一つを選択し、結果取次者としての資質を高めるため研修に臨んだ。また、二月五日に全体報告会を行い、各々の活動内容を共有した。

### 教会・布教 (二名)

教会布教を担う教師としての資質を高めるために、教話実習、直信教会参拝、神習などに取り組んだ。選択者は、教話実習を終え、「倫理道徳に止まらない心の中身を濃密するには、どうしたらいいのかを考えさせられた」「世界中の人に共有できるような教えの伝え方が必要と感じた」などの感想を語っていた。



教会・布教 (調饌実習)



教会・布教 (共励会)



青少年育成 (集会実習)

### 青少年育成 (六名)

本教における青少年育成の願いと方法を学び、指導者としての基礎的な知識や技能を学んだ。前半は、小学生年代を対象とした研修を行い、その集大成として、霊地青少年少女会の小学生を対象とした集会の企画をし、実施した。後半は、中学生年代の研修として、自然の教場と言われる野外での活動としての野営を体験した。

奉仕 (三名)



奉仕 (菩提樹交流会)

特別養護老人ホーム「寿光園」、共同作業所「ワーク菩提樹」での研修や、車椅子実習、DVD学習などを行った。DVD学習を通じ、今まで誤解していたことを学び直す機会を得て、施設研修では、日常の活動への参加や交流会などを通し、様々な人々と触れ合い、相手のことや自分自身のこと、そして障がいを持つ人々を取り巻く環境などを知ることができた。教師を目指すものとして、大きな示唆を得ることができた研修であったと感じている。

教学 (三名)

信心の自己吟味とされる教学に対する理解を深めることを目的として、紀

要論文の講読会を行った。そして、各自の問題意識に基づいてテーマを設定してレポートを執筆し、それをもとに検討懇談会を実施した。また、聖蹟巡拝として瑜伽大権現、五流尊龍院、堅盤谷の金神社を、平和学習としてホロコースト記念館を訪問し、それぞれ報告書を作成した。



教学 (レポート執筆)

■礼典実習

礼典実習では、前期の「祭式」及び「祭詞」の授業で習得した基礎的内容をもとに、葬儀式、五十日祭並びに合祀祭、結婚式、地鎮祭の各諸祭を、乾物、野菜、果物などを調饌し、実際に祭服を

着て祭員を務め、本番に近い形で執り行った。各諸祭の意味合いや次第を改めて確認し、実際の設えを時間内に皆で分担して整える中で、模擬祭典であっても少しでも良い祭典となるよう心を配る姿が見られた。学院生全員がいずれかの諸祭で祭主を務め、自らが起草、浄書した祭詞を奏上する貴重な機会ともなった。卒業後の御用も視野に入れ、それぞれが真剣に実習に取り組み、在籍外教会実習においても、この学びを活かすことができたようである。



礼典実習 (告別式)

■在籍外教会実習

在籍外教会実習 (二月二十日～三月二日) は、本部広前の修行生として、在籍教会以外の教会活動の実際に加わり、教会長の信心や教会現場の布教姿勢に触れることを通じて、これまでに培った自らの信心・求道姿勢を吟味し、自己の役割を明確にしていくことを願いとして実施している。

学院長の「神様が自分に一番相応しい教会へ差し向けてくださる」という言葉を胸に緊張した面持ちで各々の実習先へ出発をした。様々な御神縁を頂き、教会長先生のご教導のもと、教会現場での信心に触れ、布教の実際を見させていただく中で、多くのことを学び、気付き、様々な示唆を得たようである。一人ひとりが神様の働きを感じた十二日間の実習だったようだ。



礼典実習 (結婚式)